

# 卷頭言

派遣労働者が道具を棄てる様に解雇され、その日から住む場所も収入も失う。「企業は社会の公器である」とその経営哲学を実践し、不況時にあって従業員を一人も解雇しなかつた松下幸之助氏の矜持は今の経営者に望むべくも無い。正社員への賃金は人件費、派遣社員の賃金は物件費と呼ぶのだと言うに至っては、「企業は社会の公器ではなく社会の狂気」と言わざるを得まい。

この様な社会を生み出したのは、いわゆる「グローバル資本主義」(米国型金融資本主義、新自由主義)である。それを積極的に推進したのは、小泉・竹中であり、熱狂的に支持したのが日本国民であった。その結果、人と人とのつながりは稀薄になり、大企業、株主優遇は急激な貧困層の増大をもたらし、改革の名の元に福祉、医療は圧縮され、後期高齢者医療制度を生み、やり場の無い孤独な若者は無差別殺人に走り、中高年の自殺者は増加した。昭和三十五年頃「女子大生亡国論」がマスコミを賑わした。彼女達は今六十代、八年前小泉指示でマスコミに踊らされた世代。四十年を経て国を亡ぼしたと言ふべきか。

私は常に権力者(国家権力を含むあらゆる権力)に対して懐疑的であり続けた。それは国民を戦争に駆り出すのが政官財の権力構造であり、権力は決して弱者の為に活用されないからだ。あるいはそれは根元的な人間の弱さの証明。私はその事を決して忘れないで生きて来た。そうすると、そこから見えて来るものがある。今私達が失ったものは私達が選択したのであることを。それを踏まえてしか、日本の再生が無い事を私達は知るべきである。(高崎)

## 太陽の舟 目次

三十一卷 二月号 (通卷一九〇号)

わが愛する歌 — 名歌鑑賞 —

庄司 久恵

巻頭言

高崎 邦彦

二十五首詠

渥美 崇子

阿部正路論 (第八十八回)

須藤 宏明

歌誌散見 (第六十四回)

豊泉 豪

作品 I

堀井 英範 他

十二月批評 (作品 I)

原武 寿子

合 評 (座談会)

塚本 正子

選者十首

岩橋千代子・武田 節子

秀歌抜芳 (二八八号)

森本 元昭・上田やい子

作品 II

高崎 邦彦

書評 歌集『風待ちて翼は』

他

作歌の目・作歌の技法 (第四十九回)

三木 勝

文法講座 (二)

奥田 清

歌帖余白 (六十二)

松岡 三夫

歌会・支部報告 他

山田(紀)・照山・松岡

編集後記

山田(紀)・照山・松岡

題字

阿部正路

表紙

イラスト 阿部正冬

表紙

イラスト 阿部正冬

表紙

イラスト 阿部正冬

# 人生は旅

渥美崇子

娘がくれし紫紅の花鉢窓辺に置けば部屋は明るくわが胸てらす  
日々をひとりの部屋に寝起きするわが描きし絵あまた壁にかざりて  
知らぬ間に一世紀こえ尚生きる与えられし命ただ感謝して  
もの心つかぬ幼より歩みきて一心に生き百越え三歳

廣大無辺の宇宙に命うけ生きこしぬ実<sup>あ</sup>に人生は旅することなり  
明治半ばオックスフォード大への留学の父帰国後に生れし吾と聞く  
聡明な父なりしも過労に倒れ吾は十八歳にて家庭教師する  
向学を望めどかなわず英語、速記、タイプ独学し外国商館に勤む  
サンドウッチ弁当作り持ちバスに乗り出でゆきし日は若かりしかな  
偶然か出逢となりて求婚され結婚はひとえに神の導き

生れ来る幼児育てつつ出勤すミルクの支度を女中に託し

戦時となり空襲の度防空壕に入る末子と上三人は学童疎開に

朝夕に蜜柑を食べて元気よと手紙をよこす静岡へ疎開の吾子が

戦後子らを大学へと又働き外人の助手をせば世界の香り身につきゆく

停年後ひとり出でたる世界旅ロシア船にて大洋をゆく

夏の陽をうけてラインはゆるやかに古城の建てる岸辺流るる

ローレライの歌そこはかと聞え来て古き伝えの岩みどりなり

満艦に灯りともして夜のセーヌ進みゆくバトー燦然として

夕食の窓より見ゆる雪山は夕映えて朱鷺に色変じゆく

赤道を越えて南下すジャンボ機の揺れにまかせて仮寝の夢を

雨林とう熱帯樹林に入りゆけば昼にして暗く黒く湿らう

ポピーの花色とりどりに風にゆるる丘べに立てばパラダイスに居る

田園につながる碧き空のもと宇宙の永遠の刻を見るなり

欧州、イタリア、アメリカ南半球と独りゆきしわが人生は一世紀の旅

楽しみも苦しみもありしわが旅路主に感謝して召さるる日まで

バトー＝遊覧船

南半球の二国  
オーストラリア  
ニュージーランド

## 阿部正路論

須藤 宏明

## —写実と浪漫—

阿部が重視する写実とは、文学史での狭義の写実主義にのみ限定されているのではない。広範囲での「ものを見る」という写実である。この時の「もの」とは、実体としての「もの」だけではなく、「もののけ」の「もの」をも意味している。つまり、阿部の捉える写実とは、この世の森羅万象すべての「実」を写すという意味である。したがって、阿部のコンテクストでは、幽霊や妖怪や風の又三郎も、確かに実体として把握され、正確な描写がなされていけば、それは美事な写実なのである。風の又三郎を確かに感じ取り正確な表現力で歌った歌集は、阿部のコンテクストでは、素晴らしい写実の歌集と位置づけられるのであろう。

阿部は写実に対してこのような思惟を有し、文学観の支点到に置いている。しかし、文学史的な意味での写実とコントラストに位置しているのが、浪漫主義文学である。教科書的な図式では、写実と浪漫は「↑↓」という反目の印で整理されている場合が多いが、そう簡単にはチャート化はできない。北原白秋に写実的な要素はないと言えるだろうか。釋道空は、

極めて写実的表現を重視した奥深い浪漫主義者である。何より、阿部正路の歌が、写実と浪漫を行き交い、往還する、羽ばたく自由な鳥のような思想と表現方法に基づいている。阿部は、極めてリアリスティックな浪漫主義者と言うべきであろうか。それとも、極めてロマンティックな現実主義者と言うべきであろうか。

阿部は、浪漫主義文学に対して、「浪漫主義文学研究（Ⅴ）」〔浪漫主義文学研究会会報〕昭和四十年七月七日発行・編集発行人阿部正路・国学院大学文学第一研究室浪漫主義文学研究会（発行）の巻頭の文章「自殺と挫折」で、

あの鳥のように、空を飛ばうとして、結局、高い崖から飛び落ちて死んでしまった白痴の運命を描いた、国木田独歩の『春の鳥』（独歩集）明38・7近時画報社刊）は、この国の浪漫主義文学の作家達の運命をも、暗示するものではなかったか。

と述べている。鳥のように空を飛ばうとする精神性が浪漫であり、崖から落ちて死んでしまうというのが現実である。阿部は、浪漫主義文学の作品に、行き交う自由な浪漫としての精神性と、それがもたらす過酷な現実を読んでいるのである。興味深いのは、阿部が浪漫主義文学を論ずる場合、

もともと、浪漫主義文学の作家達の精神のありようは、自信に満ちた自己陶醉にある。

と現実よりも、やや精神性に比重が傾いているという点である。自己陶醉は、結果的に自殺や挫折という不幸な現実に帰結するのだが、阿部はそこに至る精神を真摯に捉えようとする。それが、阿部にとっての浪漫主義文学なのである。

# 歌誌散見 第六十四回

豊泉 豪

〔訝〕③

前稿に続き、「訝」五十一号（〇八年九月）から短歌作品を鑑賞する。

・ゼリー型にゼリーやうやく固まりて海風は花火の音運びくる

小澤 一恵

ゼリーの形と質感、海風が運んでくる遠花火の音が、夏の夜の涼しさを浮かびあがらせる。「やうやく」は「固まりて」にかかるが、昼間の炎暑の中で待ち望んだ涼しさに、ほっと一息つくような気持ちを表され、さらに「固まりて」にも、すべての物が溶けてしまうような日中の暑さが終わったという、時間の経過が暗示されている。取り合わせの妙と、奥行き深い表現で、心地の良い一首となっている。

・アカシアの千の花房ふとゆれて深き内より黄葉を散らす

五十嵐良子

枝や葉を覆い隠すかのように咲き盛っているアカシアの花。その花房が身じろぎをするように小さく揺られて、深奥から黄葉を一枚散らした。表面的な華やかさとは別に、生命存在が常に内側に蔵している滅びを歌った、すぐれた写生歌である。余談ながらアカシアは常緑樹であり、歌謡曲などによく登場するのは、実際にはニセアカシアが多く、黄葉するのはニセアカシア

だそうである。

・夕立を当てにしないでと念を押す水遣りが億劫げなる夫に

中川 絢子

三泊四日の眼科の手術入院前後を歌った連作である。へどうせ夕立があるだろうから」と花の水遣りを怠る夫。以前そのようなことがあったのか、そのようにしかねないことを見透かされているのか。四コマ漫画の最終コマを見るような歌で、その根底には家族愛がある。手術成功後、ものの輪郭がくっきりと見えるようになったことを歌った「七月の暦の海の群青に見入りつつわれも灯台となる」にも魅かれた。

・あの時のわれを言ふならしどけなしふたたび問はれていましどけなし

浅野 光一

〈あの時の自分は分別なく、だらしなかつたなあ〉と回想した後で、〈じゃあ今は〉と問われる。自問でないとするれば随分意地悪なきり返しである。過去の自分を恥ずかしく思うことは誰にでもよくあることだが、それに比べて今の自分は生長しているのかと考えると、大して変わっていないことに気付く。次に「自己嫌悪は青年の誇り反省をうながして老人は自分を許す」が並んでいる。自己に向けられたアイロニーを感じるが、決して自虐でも開き直りでもない。齢を重ねた現状を愛惜する思いが底流にあるのだろう。

磨かれた簡潔な表現によって、大きな広がりや深い奥行きを持った世界が現出する。そこに短歌を読む喜びがある。本誌を読んでもそのことを実感した。

〔訝〕の項、了

## 十二月批評（作品Ⅰ）

原武 寿子

- ・親の恩感謝にかえて娘のくれし旅行チケットありがたく受

- ・一人娘の気配りくれしやさしさに感謝の念を胸にきざみぬ

八代 陽子

二十五首詠のはじめと終りの詠草に娘さんと親御さんの互いの感謝の気持ちが溢れ出ています。このように、親子の間で常に信頼と感謝の気持ちがあれば現代社会の犯罪等は起こらないのではないでしょうか。

- ・復活の人力車引くイケメンの急がず止まらず笑顔たやさず

山田 紀子

「イケメン」に加えて歌調もよく臨場感があり楽しくなりました。作者は人力車にお乗りになったのでしょうか。きっと、快適な乗りごちだった事と思います。

- ・月見酒酔うほど本音の出る話酔ったふりしてしっかと聞き

渡辺 幸子

お酒に酔って本音とは納得です。酔ったふりをして耳をすましています。これも又滑稽だと苦笑しました。

- ・ひとしきり会話がはずむ夕餉どき活けた野の花名知らぬ花

今井 芳枝

お花が好きな人は、道端のすみずみまでも目が届きます。花の名前はわからなくとも、その一本の愛らしい花で家族の

会話はふくらんでゆきます。夕餉どきの主役となった訳ですね。心あたたまる「うた」でした。

- ・はぐれ鳩雨に打たれつ毛づくろい心を決めてか空に飛び立

大橋 俊弘

作者は雨の中の鳩をじっと見つめておりました。毛づくろいをしている間、いろんなことを想像されたことと思います。そして、飛び立った瞬間に「心を決めたんだ、な」と。安堵の気持ちが伝わります。鳩と同じように人間も辛苦を味わいつつも前へ進む事の大切さを痛感しました。

- ・ふるさとの秋の味覚が小包に詰められ届く母のぬくもり

梶川喜與志

お母様から届いた小包を感慨深く詠まれています。作者とは対する立場の母ですが、少しの隙間をも惜しんであれもこれもと詰めこむのです。それも、出したり入れたり・・・と。喜ぶであろう我が子を思うばかりに。このような心やさしいお子様をお持ちのお母様は、この上ないお幸せな方だと、胸があつくなりました。

- ・揚げ羽の幼虫守るか山椒誇るか迷ふ割り箸幼虫をつまみ上

川村 貴美

やがて成虫となる美しい揚げ羽と香味ある山椒を思う作者の迷いに共感いたしました。虫を素手で掴むには勇気がいりますね。いまだに私も割り箸愛好者です。

## 十二月批評（作品Ⅱ）

塚本 正子

・いきり立つ犬の背を撫でくり返す所の言葉「あとえって!!  
あとえって!!」

小林 絢子

一首目の歌で草むらに小さきやまかがし（蛇）が頭をもち上げ、犬と向き合う様子がわかりました。いきり立ち吠える犬の綱を引き背を撫でながら、「あとえって」（もういい）と繰り返す方言のやさしく、様子が見えます。

・散歩道伸ばして見ても歩けたわ、胸ふくらませ明日はもう少し

込山 千代

散歩の距離はなかなか伸ばせないので羨ましいです。口語でもとても明るく御元気に歌い読む人を楽しい気持ちにさせてくれます。がんばって下さい。

・今まさに好悪越えて全地球は一つになりゆく黎明の時

佐田 孝義

朝刊にクラスター禁止条約に署名する中曽根弘文外相が載って居りました。大量に持つ米・露・中・イスラエルは条約に参加していない。経済も食も不安が広がる事ばかり。本当に地球が一つになるきざしが欲しい。

・綾とりの梯子もあらざり亡き夫に秋の七草夢に渡さむ

庄司 久恵

「天のかけ橋」七首目の歌、会えるなら渡って行きたいその糸の梯子もない。亡き御主人に夢の中で秋の七草を渡そう。

じいんと胸にひびきます。

・世の中はどうなってるのどうしたの人が人ではなくって  
いる

杉本 和子

本当にどうしたのでしょうか。命の尊さを感じないのか殺人事件が続き、振り込め詐欺が老人を狙う。平常の言葉で携帯短歌のような歌い方だが調べがよく、気持が表現されています。

・支へ合ふ夫婦と覚しき二人づれ少し羨し秋霖の街

多久和玲子

秋の時雨の街で見かけた御夫婦を少し羨しいと思われた歌。結句の「秋霖の街」が歌の内容を締めて良かったと思います。

・幸せのかたち様々われは見き たとへば野良に餌やる媼

土橋 茂徳

餌を与えた猫の喜ぶ様を見て老婦人の姿が幸せそうに見える。日日のささやかな幸せは…：本当に此の様な事から始まる。一日二度も餌を与えていた子猫の死・野にお墓をつくられた。遠出はしなくとも御二人で愛に満ちた幸せな日々を過ごされているのがよくわかります。

・ひとたびは電線に来て雀らはわが庭の柿つきつきに喰ふ

長須 正文

雀らは先ずは電線に並び、様子を見乍ら庭の柿を狙い、つきつきと喰べて了う。それを眺めて居られる作者のやさしさを感じます。きっと甘くおいしい柿なのでしょう。家の隣の柿は大きいけれど渋柿未だ実をつけています。

# 合評

## 座談会

E 今回は二十年十二月号の中から四首を選んで合評を行います。最初に生稲進会員の

全天の夕焼け胸をかきむしる 死んだ女の残したるもの

をとりあげます。如何でしょうか。

Q 一首に漲る激しい愛と追慕が胸をうちます。全天の夕焼けの美しさが、亡くなった愛する女性との思い出をかきかたてている。この歌は激しい表現の言葉でこそ詩情があると思います。

H 「全天の」と、強い言葉で表す必要があったのか、と思いました。夕焼けは西空のほうか中空ですよ。下旬なかなか難しいです。読者の想像にお任せします、という歌です。

B 「全天の夕焼け」なんてありえない訳で、あえて作者が全天と言っているところに、作者の一種の思いがあるのだろうけど、言葉としては乱暴です。同じ作者に「全天の夕焼け仰ぐ目にしみる 死んだ男の残したるもの」という歌があるので、男と女が対になっている歌と考えて鑑賞すべきではないか。

Q 私は一首独立の歌として読みました。

G 「胸をかきむしる」ものは死んだ女の残したもののなのか、夕焼けなのか、どちらにもとれる。作者の胸をかきむしるものは何なのか、がわからない。全体的なモチーフは良いと思うけれど、未消化な感じがする。

B 「胸をかきむしる」のは何か、と考えた時「死んだ女」に対する後悔かもしれない。追慕なのかもしれない。この歌

は作者の体験なのか、フィクションなのかと迷った。ストーリー性が魅力だが曖昧な点もある。作者は楽しんでるな、という気がしている。

E では、次は君塚一雄会員の

この国に鳶ゆうゆうと輪を描く戦せる国に鳥の影なし

です。如何でしょうか。

Q 今の日本は平和であり、昔、戦争があった頃は空襲があり、敵機と戦ったりで、空には鳥の影が無かったように思います。戦時中を思い出して読ませて貰いました。

H 「この国」とは、日本のことを言っているのですね。平和礼賛の歌ですね。ただ、私は「せる」の使い方にひっかかりました。

B 文法的には間違いはないです。戦という名詞＋サ変の未然形＋存続の助動詞「り」の連体形「る」ですね。この場合は「戦争をしている国」と訳すことになる。平和な国と戦争をしている国との違いを鳥とおして表現している。なかなか面白いです。ただ、「鳥の影なし」というのは観念的です。「この国」とは何処の国を指しているのか。日本であるならば「日の本」とすれば良い。言っている事はよくわかるし、上手くまとめているが、リアリティがないです。

H もっと具体的にですか？

G 私だったら、「この国の鳶はゆうゆう輪を描く戦のあらぬ国の大空」とする。戦の無い国の空を詠んだほうが良いし、自分の目で見たものを詠むことですね。

B 平和な国と戦争をしている国の対比じゃ無くてね。

**G** そのほうがかえって戦をしている国の悲惨さがでると思う。  
**E** では、玉川愛子会員の

病みてより恋ふもの多し風、翼、出会ひし頃の貧しき君  
 に移ります。結句の「貧しき君」はどうですか。

**B** 字足らずだから「貧しかる君」になおす。

**Q** 長い闘病生活で作者が愁うものが、風や翼であり、どこへでも自由に行けるわけで、憧れもあると思います。下句も良いですし、心の美しい歌と思います。

**H** いつもの玉川さんらしい歌ですね。風は空中にいつも吹いているし、翼は風に乗って空高く飛んで行く。自分の憧れを風と翼に託して上手く詠んでいますね。「出会ひし頃の君」は若くて清々しくて、理想に生きていた頃の君、と解釈しました。

**B** 上句は自然を、下句は現実を詠んでいる。それらを上手に使っている。爽やかですね。元気な時には、何でも無いものが、病気になってはじめて、自由に動けるもの、空を飛べるものへの憧れがわいた。それが風と翼に表われている。「出会ひし頃の君」は今も継続している君、イコール夫ですね。作り方が上手いです。

**G** 長い歳月を歩いて来た、という感じがする。

**B** 結句だけが字足らずで惜しいです。語調を調えるために、カリ活用の「かる」を使う事です。大切なことは結句は字余りになっても、字足らずにしないことです。

**E** では最後に原武寿子会員の

青虫をふとらせながら球結ぶブロッコリーの秋の菜園  
 です。いかがでしょうか。

**Q** たのしくて明るい歌です。「青虫をふとらせながら球結ぶ」という句も良いし、「ブロッコリーの秋の菜園」と続く明るさが良いです。心豊かな感じがします。

**H** 実景が目につかぶような作品で、好きです。私ならば青虫を割り箸で摘まんで取り除くのにおすすめです。

**B** 作者は菜園を楽しんでやっているんでしょう。ブロッコリーはキャベツ科です。青虫を割り箸で摘むような都会人にはわからないでしょう。

**G** 人間も青虫も自然に養われているという喜びみたいな充実感が表われている。

**B** 私もそう思う。青虫がつくということは、無農薬という事でしょう。だから、人間にも良いし。

**G** 青虫も太って、ブロッコリーも太って球結ぶですね。

**Q・H** 同感です。

**B** 「ブロッコリー」の「の」は、「ブロッコリー生ゆる秋の菜園」としたらどうでしょう。歌としては、それほど重いものではないし、さり気なく詠まれている。自然の恵み、自然の息吹、そこに生きている私、と三つの循環がうまく作者の中にあり、という歌。

**G** 私は「の」はそのままでも良いと思う。

**B** それでも良いのですが、菜園の中には、ブロッコリーだけではなく、もっとほかの野菜もある。色々ある菜園の野菜の中で特にブロッコリーに着目したと言う表現の方が広がりもあり面白いと思う。

**E** 本日はどうも有難うございました。(記録・山田紀子)

選者 岩橋千代子

ゲリラ豪雨なんて初めて聞いた日の積乱雲はスクラム組んで

福地 啓子

風紋をさざ波にして秋の河流るともなく流れ行くなり

三木 勝

暎れば水車の廻る音のして糸繰る母の幻の見ゆ

湯本 いと

ここのみを世界の如く鳴く虫の花閉じ揺るるつゆ草のかけ

井上萬里子

うつしみの人の関わり血か縁かこころ寄せれば境のあらぬ

北川 昭

時間かけ失敗重ね今がある人は人なりわれはわれなり

狐塚 秀子

道を説く人の訛も稲田ふく風も温とき母のふるさと

近藤 リイ

コスモスの蕾のかたく手に触れて秋は寂かに身にひろがり

末次 房江

ぬ 幸せのかたち様々われは見き たとへば野良に餌やる媼

土橋 茂徳

旅人を受入れ更に見送りて更地は地球の土に還れり

中村 陽子

選者 武田 節子

雲おほふ北アルプスに光射しゲレンデいっぱい彩雲流る

深谷 幸子

噛み合わぬ心の隅に灯されしかすかな期待年月の分

宮原喜美子

秋桜の陽に温もりぬ休日妻と語らふ楽しさにゐる

森本 元昭

夜の闇にしずもり知らず香りたつ金木犀はおのれを示す

山田田鶴子

明けきらぬ港発ちゆくつり舟は波すべらかに次々と出す

石塚 立子

空なると思えばこの世や安らげし今のこのとき生き抜くば

北川 昭

かり おわら節の流れ静もるたそがれの町見続けし観音笑まふ

高崎 邦彦

も 黄葉の街路樹のした通り来ぬ葬りの日にも回向の今日

月田 藤枝

暑き暑きこの夏も行き月清し山茶花の葉の窓外に照る

土屋 道子

膝老いて遠出・速歩もままならず速さかかや耀く世の隅に生く

土橋 茂徳

選者 森本 元昭

朝露に尾花のひかる山の里歩く足もと草紅葉なり

深谷 幸子

ひっそりと夜露の落つる気配して時をちろちろ虫の鳴く声

福地 啓子

機関車の蒸気弱くて立ち往生敵機のいない空を見上げる

丸山孝一郎

夜ごと飲むたった五ミリの錠剤で制御されてるわが神経は

浅見 時子

悩みつつ歌作りある縁側にスイーッチヨスイーッチヨ馬追

上田やい子

いの鳴く

江面 伸子

☆亡父に似しと云はれし吾は亡父の顔知らずに生きて傘寿を

川村 貴美

戸の外は虫の楽園聴く吾は障子ま開く籠の鳥なり

紫野 百代

過ぎ越しのいくつ哀しびあわあわとたちゆらぎぬてしろし

芒穂

☆車椅子押しくるる孫の口笛が野道を抜けて木の間を透る

月田 藤枝

選者 上田やい子

公園のシュトラウス像背に夫と腕絡ませてカメラにおさ

む 八代 陽子

婿殿は酒が嫌いとし失望の父の晩酌死の前日も

渡辺 幸子

☆亡父に似しと云われし吾は亡父の顔知らずに生きて傘寿を

迎ふ 江面 伸子

山程のやりたきことの多き夫のその適はず秋晴れ続く

河口 礼子

我が子らと遊び呉れにし亡き姑を今想い偲ぶ孫と遊びて

工藤 和子

毛糸玉転がしながら綾とりの糸編む若き母の指先

庄司 久恵

児の墓に金木犀は咲き開けて香焚く吾の肩に降りくる

月田 藤枝

車椅子押しくるる孫の口笛が野道を抜けて木の間を透る

鶴来けい子

パンの耳庭隅に置き待ちわびる姿現すリスが一匹

豊島 英明

夕やみが近づいてくる夢のない淡い孤独に残った余白

原田 寛

十五年温めて来し外つ国の夫との旅の夢叶いたり

八代 陽子

その旅行は一人娘が月々の僅かな小遣いを切りつめた添削バイトの積立てで得た金を親への感謝にとくれた旅行チケットによる旅行であると言ふ。昨今の寒々とした世相の中で、真実心暖まる話した。だからこそ巻頭二十五首「娘のくれし夢」一首一首は、作者が娘さんの気持ちをお大切に大切に受け止めて、旅で見る風景の一つ一つを娘さんと一緒に見ているその思いがひしひしと伝わって強く心を打つ。中欧諸国は幾度の戦火を潜り抜けながら、多くの文化遺産や音楽を残して来た。そんな歴史を自らのものとして旅立った作者の見る風景は単なる旅行詠を越えて、作者の胸に深く浸透する。「朝日うけポプラ柳絮の舞う町の故郷に似る風の匂いす」「巡り来てドナウ河畔に空仰ぐ北斗七星夫と探しぬ」これ等はまるで作者の日常生活がそのままにドナウ河畔に移動しただけと言った趣きすら感じさせる。旅はまったく非日常と思うからこそ旅を志向する私にとって、又異なる旅の有り方を教えてくれた。そしてこの旅は親子の絆を更に深くし、作者は再び孫の顔を見てアメリカの娘の夫の留学に伴い家族で渡米した娘の元へ旅立つのだった。

留守番と婆やの役目無事終了ドトールに寄り祖母解除

せり

村田 一江

小学生と幼稚園児の二人の孫を二泊三日で面倒を見る事になった作者、男の子と女の子ではその凄さは全然違うのだが、恐竜が出て来るから男の孫であろう。さぞ大変だったろうと推察する。とにかく怪我をさせてはいけない。気苦勞と肉体疲勞、それが又楽しい。つくづく摩訶不思議な世界だ。「ドトール」はコーヒー店。駅前でコーヒーを飲みながらやれやれと思うその感情を「祖母解除せり」と納めたのはうまい。

ふるさとの匂いうしなう上野駅啄木の歌碑も人返り見  
ず 湯本 いと

啄木の歌碑には「ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそを聴きにゆく」の歌が刻まれ、東北からの集団就職の列車が到着する18番ホームの列車止めの所に建てられていた。しかし新幹線が東北に伸び18番ホームは廃止され、今は15番と16番ホームの間ぐらいに置かれている。上野駅は急速に近代化が進み、もはや東北の玄関口のイメージは無い。作者の生家は東北。上野駅には深い思い入れがあったらう。その惜別の情を下の句で見事に表現した。

ことごとと厨に我は夕仕度僅か十分夫は箸置く

渡辺 幸子

食事は人間の営みの中であるいは最も大切なも

## 前々号 (288号) 秀歌抜芳

の。その中で特に夕食は大切。一日の出来事や思いを語らいつつ食を楽しむ時間。しかし、昔の男性は早飯しが美德と育てられ食事時間は短い。ましてや夫は酒を飲まない。ある意味仕方が無いか。それに妻の料理を誉めない。時間を掛けて料理を作る妻はたまらない。それも二人住まいで。まだまだ日本に残るあるいは原風景なのかもしれない。

これもゴミあれもゴミねと思いつついつそ見ないで処分をせねば

伊藤 モト

鴨川に引越す時、四街道の家を処分しなかった一番の理由は荷物の整理のつかなかった事。鴨川の家にあるより多くの荷物が残っている。しかし、生活するのに何の不自由も無い。小さい頃から物を大切にしろと教えられ、今は捨てろと教えられ。合理的には今が正しいのかもしれない。しかし見回りにある物に自分の歴史がある。だから見ないで処分しなければ何でもほしくなって処分が出来ない。ある時点から人が生きるとは捨てる事なのであろうか。

やや弾む気持を乗せてふたり旅一日よ急ぎ過ぐることなかれ

上田 やい子

「白波の寄せくる」ごとに夫と吾の足跡さらう伊東の砂浜」阿部先生ならきつとあのいたずらっぽ目目で、「ああげちそうさま」と言うに違いない。

これ程に素直に明るく夫への愛情を言葉に出来る作者の純粹な心にまず感動する。「やや弾む気持」と控え目に表現する所は直截表現で恥じない現代女性に無い人としての深味。直截表現をどう捉えるかは別にして、私達はこのような表現力を身に付けていきたいと思う。

裏の森春はうぐいす夏は蟬秋紅葉と恵み豊けき

大橋 俊弘

作者は神職にあると云う事であれば、裏の森とは神社の鎮守の森と云う事になる。きつと深く豊かで大きい森に違いない。各季節の特徴的なものを取り上げ順番に並べて自己満足している平凡な歌と取る人も居るかもしれない。しかし、鴨川に越して私の家の周りは正しく抜芳歌と同じ状況。だから結句の「恵み豊けき」が素直に私の胸に響く。

いざ出でむカムイパポニカアホイヤ晴れてひろぐる北の大地へ

奥田 清

歌集「炉端」のあとがきに「喜寿」こそ青春なれの気概をもって、唄わんかな、詠まんかなである。と書いた作者のその気概のままの「北海道吟行抄」七首。特に抜芳歌「カムイパポニカアホイヤ」はアイヌの言葉で「どうか明日も天気でありますように」の意。まるで、昨晚の祈りが今朝の晴天をもたらした。祈りの言葉を口に未知の世

界に歩き出す。まるで青年のような心の弾みを感じるのには私だけであろうか。

「いけませんちゃんとしなさい」「どうすればいいか教えてくれぬ先生

熊谷 香織

「ちゃんと」には色々意味があるが、この場合「基準に合致し、条件を十分に満たしているさま」が最もふさわしい意味か。「いけません」があるから条件に合致していない。条件とそれに伴う正しい行動を説明せぬ先生の注意は、一種の労働証明。多くの言葉を生業なりわいとしている先生が最もあまい言葉を使っている。物事の核心を見据えるその目線に大きな可能性を見る。

意識して「どうせ」の言葉変換す「せっかくだから」今を楽ししも

狐塚 秀子

「どうせ」は断定的または投げやりな気持を伴う副詞。この場合は投げやり。「せっかく」は力を尽くすこと、心を砕くことの名詞。「だから」はそういうわけでの意の接続詞。つまり、二つの言葉は物事に対応する時の正反対の気持を表わす。作者は言葉によってたらされる心の有り様にこだわる。そして自らを鼓舞する。私もそうありたいとこだわっている。

河川敷青きシートの広がりて明日の客を待ちて光れり

塩田 秋子

その河川敷の青いシートは、花火見物の席取り

のシート。花火を歌にする人は多いが、花火の前日の模様を歌にするのは珍らしい。何事も表と裏がある。華やかな世界の裏にはそれを支える人達が居る。花火師はその裏方。しかし、私が最も心引かれたのは、明日の花火客を待つシート。何気無く存在し、明日の夜はその存在すら忘れ去られるシート。だからこそ今日光る。あるいは忘れ去られるものほど尊いのではあるまいか。

魚介類常に食する吾れなれど眼前にいのち断たる辛し

志賀 優子

今この時も無数のいのちが断たれている。大自然の食物連鎖によるいのちの喪失ではない。多くは人間の欲望の為に断たれる命。生命は他の生命を奪うことによって維持される。しかし人間は自らの生命の維持だけではない多くの欲望の為に他の生命を奪う。若い頃に生きる為に他の生命を食らう自分の存在に悩んだ事がある。どんな生命も尊いと言いが平気で他の生命を奪う人間。作者の辛さをしかし今の私は共有出来ない心の倦怠に在る。

綾とりの梯子を天のかけ橋と教えし亡母の降りて来ぬ指

庄司 久恵

東京の本部歌会で高得点を得た歌。子供の頃、私もよく綾とりをした。梯子も作った。しかしそれを天のかけ橋と教えてくれた人は誰も居なかつ

## 前々号 (288号) 秀歌抜芳

た。作者は母と一緒に綾とりをし、母にそういう美しい言葉で教えられた。しかし、亡くなった母とはもう綾とりも出来ない。天のかけ橋なら、この橋を通して降りて来てほしい。その切ない思いが、綾とりの指に掛けて、「降りて来ぬ指」と詠んだ。真実切ない歌だ。

仙石のススキの原野銀色のうねり静かに秋色そよぐ

辻本わか子

仙石原は火口原。外輪山と中央火口丘の間にある平坦な低地。外に阿蘇谷などが有名。ここは箱根でもススキの草原として有名。秋のススキも見事だが、三月の野焼きも素晴らしい。抜芳歌は秋のススキを歌って、広々とした銀色の草原がゆったりと一方向に靡く姿を「秋色そよぐ」と表現して清澄な雰囲気生まれた。

ぶ ミネソタの古文好みの友思ひ万葉の切手たのしくえらぶ  
角田 順子

それは万葉の切手シールの中から、今回はどの切手を貼って手紙を送ろうかと選んでいるのか。あるいは沢山の万葉の切手シールの中からどれかを選んで送ってあげようとしているのか、おそろく前者だと思う。最近私の所に来る手紙の切手も珍しいものが多くなった。もらった時に何かしらうれしくなる。そんな事を知っている友達同士。ほんの小さな切手から生まれる心の交流。友とは

素晴らしいものだと思感する。  
幸せのかたち様々われは見き たとへば野良に餌やる  
媼 土橋 茂徳

その媼は作者の妻。野良猫は差別用語だと猫の色で名前を呼ぶ妻。その姿を見詰めている作者の限らない慈愛の目がそこにある。もはや若者と同じ価値観で物事を論じたり決めたりする必要はない。川端康成の「山の音」はそんな老人の幸せの形を描いたものではなかったか。上の句の「見き」と終止形で言い切る強さ。下の句の淡々とした記述。そこにある作者の意志。それが七首目の「膝老いて遠出・速歩もままならず速さ輝く世の隅に生く」へとつながって読む者に勇気を与える。

ぬ 金蚤が白露の夜に九階のわが家にとびこみ遊んでゆき  
野村富久子

「蚤」は「蚊」の異体字。当て字だ。カナブンは、日本では北海道以外ほとんどに生息し、昔は市街地にも多く見られた。この昆虫は飛行能力が優れていると言う。だから九階にも楽々飛び込んで来られたのあろう。「白露」とは二十四節季の一つ。九月八日頃にあたる。ちょうど秋風が吹き始める頃、九階の作者の家の中にカナブスが飛び込んで来て、暫く遊んで行ったと言う。爽やかな秋の風の中、市街地の九階で織りなす人間と昆虫のささやかな交流。素敵な夢物語だ。

## 特集

### 書評 『風待ちちて翼は』 石塚立子著

#### 『風待ちちて翼は』に想う

高崎 邦彦

「太陽の舟短歌会」の同人、石塚立子さんの第一歌集「風待ちちて翼は」が上梓された。同歌集の書評については、序文に書かせていただいた。今回同歌集の書評特集に際し私は同歌集出版の意義について考えてみたいと思う。

何度も私は阿部先生のお言葉「歌人で有名になるな」と言う事について述べて来た。それは、先生が私の性格を熟知した上でのお言葉であり、先生の理想とする同人誌的結社誌の守り役としての役割に名声は不用であるとお考えによるものと思う。「太陽の舟短歌会」と言う同人誌的結社にあって、その代表たる者が、歌壇の中で名声を得ようと奔走するならば、その本質を忘れ、必ずそこに派閥を生み、会そのものを自分の枠にはめようとするであろう。その結果生じるものは、会の自由と平等の喪失であり、分裂である。いたずらに会の拡大を図り、純粹に短歌を愛し、短歌を創る事に心の平安を求めている人達に過剰な要求を課す事になろう。多くの結社の離合集散を誰よりも沢山見て来られた阿部先生にとって「太陽の舟短歌会」の分裂は耐え難い事であろうと、私は深く心に思い定めている。

しかし、それは代表としての私の役割であり、多くの会員諸氏にとって不用の考え方である。私は歌壇と言えど、魑魅魍魎の集団だとは思わない。必ずや立派な見識を持ち純粹に歌の力量を判断する能力を持ち、そして何より平等であろうとする歌人は必ず存在すると信じている。かつて阿部正路が存在した様に。したがって、優れた歌を創り、優れた歌集を世に問えば、必ず公平な評価をしてくれるものと信じていたい。

その意味で、今回「第一歌集」と銘打って出版した石塚さんの「風待ちちて翼は」は画期的、意欲的な出版だと私は評価したい。今まで「太陽の舟短歌会」から歌集を出版した多くの会員の歌集が画期的、意欲的で無いと言っているのでは無い。それぞれの会員の方々の重く深い自分の歌集に寄せる想いは私が一番良く知っているつもりだ。そしてそれは歌集を出版した会員の人生の金字塔である事は言うまでも無い。それでも尚今回の出版に深い意義を感じるのには「太陽の舟短歌会」の会員諸氏の歌の力の確かな向上と努力の集積の上に「風待ちちて翼は」は存在すると言う事なのだ。言い換えるなら「太陽の舟短歌会」にはたくさんの翼を広げて風を待っている歌人が居ると言う事なのである。

石塚さんの「風待ちちて翼は」は客観的に見て優れた歌集と言える。心から出版を祝福したい。そして第二、第三の歌集が上梓される事を心から願っている。しかし何にも増して私が夢見ているのは、多くの会員が風を捕えて大空に飛翔して行く姿なのだ。

## 歌集『風待ちちて翼は』の

### 批判のための視点

三木 勝

『風待ちちて翼は』は、極めて歌集らしい歌集である。歌集の持つ特徴を明確に持っている。和歌・短歌の持つ古層的・基盤的特長をその歌の群れは、群れとなることによって、明確に示している。

歌集『風待ちちて翼は』は、五つの部立てで構成されている。この構成の順序とそれぞれの前後の必然性が、論理的に可視化されて提示されているわけではない。順序の論拠が明示されなくとも、作者の中には、その論拠がある。しかし部立てが先にある、作品が後から作製されたのではない。作品の一つ一つが作られて、それを集めて、後から部立てをし、全体を作り出してきたのである。これは加藤周一が指摘する日本文化における時間と空間の特徴と完全に符合している。日本文化における「全体から部分へ」ではなく、「部分から全体へ」という思考過程の方向性は、「今ここ」の文化の基本的な特徴である。（加藤周一著『日本文化における時間と空間』岩波書店二〇〇七年 11頁）。『全体から部分へ』の思考のパターンは、ギリシャ哲学の流れを汲む西洋哲学の伝統的な理論思考である。『部分から全体へ』という思考は、その対極にあり、日本文化の特徴であるが、この特徴ゆえの生産性を考えてみるに値するであろう。歌集『風待ちちて翼は』はその考察の為の素材を十分に提供してくれているといえる

であろう。

歌集『風待ちちて翼は』は、旅行詠も含むが、作者の旅行詠は〈日本ムラの内側〉から出ていない。なぜなら、作者は〈日本ムラ〉の罅を越えていず、観光客としてしか景色と風物に接していない。己の持つ価値観と対峙する国・地域の人々との価値観の交流とその相克が見られず、〈日本ムラのムラ人〉の価値観を持続させたままで、作歌をしているのである。この点も、加藤周一が指摘している普遍的価値観を古層的に持たない日本文化の特色を歌集『風待ちちて翼は』は体現している。普遍的価値観を持つことの功罪を意識して見据えながら、〈日本ムラ〉の罅を開ける回路を作歌の旅路で私たちは探求しなくてはならないであろう。

歌集『風待ちちて翼は』は、一首一首を見るとき、優れた歌が限りなく続いていく。それは、高度高原の上の平原を歩いているようで、どこまでも平たく変化・強弱が感じられない。作者のうちにある蹉跌や怨嗟が聞えてこない。それとも作者は、蹉跌も怨嗟もない幸福な人生を今日まで送ってきたのであるうか。

歌集『風待ちちて翼は』をまとめ終え、作者は「さらに、その先に、何かを求めたいと思う自分」に目覚めたのである。高度高原の高い崖のその端から、風に乗って、風に逆らって、いつか飛翔するであろう。作者は、その機の熟する日を作者は待っている。安易な道を通らずに、出来るだけ苦しい路を飛ぶことを作者にお願いしたい。

## 名品揃い

川村 貴美

見事な第一歌集『風待ちて翼は』です。いつかNHKテレビ「小さな旅」で日曜日の朝放送された石塚様の故郷、そして母上様のことを知り感動して歌会るとき皆さんにお知らせしたことがあります。私の母も所謂脳溢血のあと十年間、駄目でした。未だ幼かった子達を東京に置いて故郷へ通いました。現在のように認知症への理解が無かった頃でしたから、今想うと、申し訳なさいっぱいで、御歌集P138〜P147の（へしんしんと）の歌群には胸を打たれました。

国内を、又外国を旅なさった章もキチンと歴史を勉強され、その上での作歌、全くスキがありません。圧倒されました。著者略歴から理科系ご出身と知り、古くから名を成した歌人に医学関係の方が多くいるところから見て、成程とその観察眼の緻密さに納得がゆきました。

家族詠も並ではなく孫という語は一ケも見当りませんでしたが切々とした愛が籠められています。

選別された上等な材料を使って料理した「いしづか屋」さんの名品揃いとも言えるでしょうか。

短歌歴五十年になろうとしている私を大いに励まして下さった歌集です。有難うございました。

## 香り高い文学

佐伯 朋子

歌集『風待ちて翼は』を一読させて戴き、石塚立子さんは、既に香り高い文学の世界を歩まれている方と感じました。

美しくも峻烈なる北アルプスの山々を望む、信州松本が故郷と伺い、優れた知性と感性に恵まれた石塚さんの、凛とした豊かな人間性に、おのずから頷くものがありました。

・海とほき丘のなだりの貝塚に太古うちよす春の波きく  
・草笛の語尾きれぎれにきく真昼 風は押しゆく青き麦畑  
詩人の心は、貝塚に太古の潮の音を聴き、遠くからの草笛を聴き乍ら、麦畑を渡る風の姿に見入るのです。

・ぬげがらとなれども母の手は温く滑らかに伸ぶ爪も美し  
・独り乗る葬送船に身をゆだね花の運河を母は急ぎゆく  
・悲しみの極みを、文学の香り高く歌に昇華させています。  
・さりさりとみぞれ降る夕一鉢の春を咲きゐる花を選びぬ  
・さよならを一つ言葉に出しよりヒリヒリと吾に孤独は襲ふ  
優れた感性を以って、言葉を磨かれる石塚さんは又、このようにオノマトペの妙手でもある。

・ポプルス<sup>ハコヤナギ</sup>の顕微鏡下の細胞は未来の森を約して青き  
微生物学に魅せられた化学者の眼が優しく光っています。  
一首一首が素晴らしく、私には遠く及ぶべくもありませんが、これからも学ばせて戴きたく思っています。旅を愛し努力家の石塚さんは、更に輝いて飛翔してゆかれますように。

## 抒情の典型『風待ちて翼は』を読んで

庄司 久恵

- 石塚立子さんの歌集「風待ちて翼は」は、総てに完成され、すぐれた一冊であり、感嘆の中に読み進み、感動した。
- 本の構成が整い五部に分類し、各部の題に一首を添えた。
- 歌うべき事柄が明確であり、曖昧なところがなく、細やかな神経が行き届き、無駄な語句がなく安定している。
- 把握に歌を詠むよるこび、生の深さがあり、温かい心情が溢れている。
- 清澄で、詩情を湛え美しい短歌群である。
- 透明感の奥に未文明なものを持った時間、空間を含有しているながら、歌の姿は実にすっきりと示されている。
- 宇宙的な自己を創造し、抒情の典型をみる思いがする。
- 人間の淋しさ、哀しさ、おろかさ、苦しみなどを詠んでも、生の声、こころの叫びは、石塚さんに詠われると、昇華され、純化され、美しく詩化されて了います。これは、とても素敵なことなのですが、一寸淋しい私です。
- 石塚さんの短歌は、始めてから十年余りとのことですが、大家のような風格もあり、頭脳明晰・理系・文系・人格・総てに優れた素質ばかりでなく、努力家であり、五ヶ所の歌会に出席、勉強なされたとのこと、尊敬することばかりです。太陽の舟のすばらしい歌人の出現、第一歌集に祝福と拍手を送り、今後のご活躍を祈ります。

## 風を待つ翼よ羽搏け

末次 房江

待望の石塚さんの歌集が出版された。期待どおりの素晴らしい歌集である。私達は大きな目標となる歌集をもったことになる。言葉の魔術師とでもいいたいような豊かな語彙とそれにより見事なロマンを構築する力を共にもつ、実力の人の歌集である。

石塚さんが大きく飛躍されたのは、お母様の看病に信州へかよわれた五年間が歌となって結実した「しんしんと」であった。この歌集の中で一番心を打つ歌群です。これで茨城歌人新人賞を獲得され、「ふいめえる」等にも参加され、ますます力をつけられた。「古都に舞ふ火の」は最初そこに発表された。歌は一つの物語となって展開する。しかも細かな心の陰翳をうつつして、思索の深みをみせて、我々を魅了する。その力に敬服しました。

- ・微細なる粒子を詰めし距離のあり月の光の淡く地に満つにはじまる心象詠の一群が好きです。
- ・小さき棘うづきしままに薄青く泳ぎつかれし魚らはねむる傷をもった魚が泳ぎつかれて眠るといふ悲しくも美しい歌は、心に傷をもったものの心にしみませ。
- ・夏の闇手探るやうに風を待ち翼となれる刻を信じき素晴しい歌集を出版され、風はたからかに吹いていると思えます。輝かしい未来へ、エールを送ります。

## 歌集『風待ちて翼は』を称う

谷河 ひさ

金木犀の香りに誘われ届きました不思議なご縁に開封致しました。歌集「風待ちて翼は」石塚立子著。感動です。ありがとうございます。「風待ちて翼は」の五つの部立てを私のペー  
スで学ばせて頂きました。I ひとぶるに・大磯の海も空も秋色です。春夏秋冬の澄みし青空より二首「夏の咎許されぬま  
ま闇深く木犀の香は髪に染みくる」「断ちがたき都を思ふ須磨  
の夜の光源氏に月光のさす」今年は源氏物語千年紀私は懐かし  
むだけです。II はるかなる山 はるかなる街・旅の体験を  
敏感な感性で詠われたみずみずしい旅行詠に懂れます。III 思  
ひ出のアルバム「娘も犬も去りたる家に夫とふたり桃の香の  
みの雛の宵ゐる」「笠山に桜は舞ひぬ、青き海、青き島にも桜  
は舞ひぬ」・私は都野正太・澄子さまに大磯支部の歌会でご  
指導いただき親しく甘えた想いは忘れられません。IV 深く渡  
れば 母上への思ひ・しんしんと・花の運河より「彷徨ひて  
記憶の戻る術の無き母住む信濃に吾は通ひぬ」「星空に花の運  
河のかかる宵母の一生の炎は消えし」V 夢の時空に・終章の  
名残り「沼の辺の木橋をひらり越えゆきし風の童子は色を持  
たざる」帯文に採られました。結びとした「夏の闇に手探る  
やうに風を待ち翼となれる刻を信じたき」・胸熱く言葉もござ  
いませぬ。ひたすら石塚立子さまの飛翔をお祈り申し上げお  
礼のご挨拶に致します。

## その先にある何かを求めて

照山 好子

表紙一面に、雪を頂く北アルプス連峰が、その峰々を一望  
できる山の端に育ったという作者。山の向こうには何かがあ  
ると信じていた。子供の頃の姿が見えるようであります。

石塚さんとは、戸定が丘歴史公園吟行会での連歌の会で同  
じ組になり、大変お世話になりました。連歌は初めてとい  
う私に、助言や、さりげなく助け船を出して下さり有り難か  
たことを覚えています。そんな矢先に歌集を頂戴いたしまし  
た。ご一緒したことで、ずっと身近になった思いでじつくり  
と読ませて頂きました。そして感じましたことは、常に、そ  
の先にある何かを求め、それを肌で感じ、歌われているとい  
う思いでした。

- ・落葉松の一针一针黄に染まり錆し鉄路に音なく降りぬ
- ・白神の山毛櫨なぐさの緑の忘れ水ただに透くもの手のひらに受く
- ・覆はれし樹水の下に息づけるミヤマキリシマかたき冬芽は
- ・二十年は疾く来しました過ぎゆきし胸高に締むる娘等の帯見る
- ・まどろみの後をたゆたふ嬰兒は光の渦を手に掴み取る
- ・夏の闇に手探るやうに風を待ち翼となれる刻を信じき
- IV 「深く渡れば」では、病む母と向き合う作者の、娘とし  
ての心の葛藤。その一首一首が心に深く染みしました。そして  
詠むことのすばらしさを改めて痛感させられました。
- ・優しさの泉は疾うに枯れ果てて鋭角のまま母と向きあ  
る
- ・ぬげがらとなれども母の手は温く滑らかに伸ぶ爪も美し
- ・銀嶺に雪形の鳥飛び去りてのちの虚ろに唯母がある

## 書評『風待ちちて翼は』

富永 道子

第一歌集「風待ちちて翼は」は旅の風景を、故郷を、そして心の風景を、言葉という形に変えて思い出とすると、後書きにあります。

豊富な語彙を巧みな構成で三十一文字の完成を示される石塚さんを、いつも尊敬し、ほど遠いながらも、目標とさせていただけてきました。

何ごとにも何ものをも、受け入れる能力と感じ取る力に秀でたお人であると、かねがね思っていました。が、こうして、その一部であるう秀作集を読ませていただくと、その思いをさらに強く致します。

・ こんこんと湧き出る水を手にくくひ地底の鼓動のあをきを飲みぬ

屋久島の自然のすばらしさを謳いつつ、地球の裏側へも連想が及びます。

・ 片耳をわづか傾け風を聴く馬の高さに春はみちくる

と気遣いの細やかさを見せ、そして何より、「深く渡れば」と詠まれた母への鎮魂に泣かせてもらいました。

・ 「まあ、あなたわたしの子ですか。それはまあ」母の放てる悲しき飛礫

・ 優しさの泉は疾うに枯れ果てて鋭角のまま母と向きあふ

・ 黄昏は悔いのふつつつ兆しきて常より温き言葉をさがす

・ ぬげがらとなれども母の手は温く滑らかに伸ぶ爪も美し

と故郷信州へと思いを馳せておいででしょう。読み進むう

ちに、私さえ、私の母へと導いていただいた思いです。元気はつらつで明るくて、飛翔を続けて止まない石塚さんですから、さらなる第二、第三……と続く歌集こそ、その揺ぎない翼であらうかと、ご活躍を期待致します。

## 歌集『風待ちちて翼は』の言葉は鋭い

原田 寛

石塚さんの歌集は、言葉が大切に大切に構成それでいて作者の個性と透明感にあふれる鋭い歌集になっています。

サアッと読み切ることができず一語一語かみしめつつ、二度三度読み返し、自分なりに消化していましたが、気が付けば再び読みたくなり元のページを繰っていました。言葉を大切にしている作品群である。

・ 牛久沼に春を誘ふ陽の照りて河童はむっくり寝返りをする  
・ 一筋の流星のあを天を裂き頬に冷たき風花こぼす

## 歌集『風待ちちて翼は』に寄せて

深谷 幸子

石塚立子同人の歌集「風待ちちて翼は」の表紙を見て、風を待つてその翼を思い切りふくらませて飛び立って行った八方尾根で見たパラグライダーを思い浮かべました。題字は高崎邦彦先生です。彼女の思いを先生の題字が引き立て、すてきな歌集とします。著者とは読売短歌講座で共に学んでいま

すが、名前のように自立心のしっかりした人です。資料等もさりげなく渡してくれ、共に学ぶことの大切さを教えてくれる人です。

- ・春待てる小さき細胞を抱きもつ 蘆・根茎の深き沈黙
  - ・沼の辺の木橋をひらり越えゆきし風の童子は色を持たざる本当に大切なものは何か。彼女の秘めた強さがわかります。
  - ・夜桜をともし灯あかり 一人づつ過ぎゆく人の消ゆる花闇
  - ・恋一つ終わる予感の卓上に紅淡くハーブティー消ゆ
  - ・さよならを胸に問ふ夜は群青の江戸の切子に新酒みたす
- 石塚さんのため息を漏らすような短歌を読んでいると思うといつまでも悩みはつきないと感じます。だからエネルギーが沸き新しい短歌が生まれるのでしょうか。

- ・柔らかき腕は翼 たたむ時嬰兒は七色の夢見る
  - ・甘やかに満ち足る頬を母によす一つ脱皮の風の止む午後
- ・教へられし通りに二本の指のぼす今日が二歳の奏のお手で孫の可愛さは限りない。いとしさがにじみでている。たった一行の短歌が生きる支えとなり宝となります。
- すてきな歌集をどうもありがとうございます。

## 『風待ちちて翼は』いま発つ

山田田鶴子

雪をおくアルプスを背景に春霞にけふる生地信州、そして『風待ちちて翼は』は題字のゆるやかな曲線と相応して柔軟で特色を持つ石塚さんの歌集です。この一書に流れるもののひ

とつは歌集名のモチーフに暗示されていると思う、伏線のよりに随所におかれている飛翔を願う歌の数々がある。

- ・羽ばたかぬ翼の中に育みし青き記憶の強き嘴打ち
  - ・春空を漂う月に昇りたき香き地球の虹消えぬうち
  - ・妻といふ枷はずし得ず夕刻を飛ぶ鱗をもつ青き魚買う
- アルプスの山の向こうの大海原や信州の凍てる様な蒼く広い虚空は石塚さんが少女の頃からの憧憬であり遙かなるものへの希求であったという。そして祖母になった作者は
- ・哺乳類にはひ立ちくる嬰兒のほのかなるもの丸ごと抱く
  - ・がらがらと積木のお城くづす手は未だハイハイの前足なのだ
- ほのかなるものを丸ごと抱くほどの愛である嬰兒のあいらしさや動作が目に見え、甘さを抑へた硬質な言葉で表現者としての達者な一面を見ることが出来ます。
- 対象を内面まで掘り下げ感覚を鋭く歌づくりの姿勢にあらためて感銘をうけました。石塚さんに喝采を送るとともに、これからの益々の充実と御活躍を期待しております。

## 『風待ちちて翼は』に寄せて

渡辺 幸子

石塚立子さん、すてきな歌集『風待ちちて翼は』でございます。感動いたしました。「太陽の舟」に載る石塚さんの短歌はとても巧みで、共感を覚えつつも時に難解な歌とも拝見していました。石塚さんが勉強の場にくつも参加なさり鍛錬なさっていることを知り、心を打つ素晴らしい歌が生まれる

ことに納得の思いです。

- ・乾きたる心の髪も濡れゆる如月の雨土に浸みゆく
  - ・咲き満ちし夜の桜の饒舌に冷たき闇は白く耀ふ
- 「春のこえ生る」の項の歌ですが、同じ情景を見、同じ思いを感じても石塚さんの歌は、思いが凝縮され、心が生き生きと伝わって、三十一文字に完成されます。

故郷の歌、旅行の歌、お母様の歌、生活の歌、ひとつひとつ読ませて戴き深い感銘を受けました。短歌の世界に大きくはばたいている石塚さんに及ばないながら、私の歌作りの目標といたします。

沢山の珠玉のごとく美しい歌の中から私の好きな歌を記させていただきます。

- ・こんこんと湧き出る水を手にすくひ地底の鼓動のあをきを飲みぬ
- ・咲き満つるアカシヤの香に包まれて花の下闇母紛れゆく
- ・夏の闇に手探るやうに風を待ち翼となれる刻を信じき

## 『風待ちちて翼は』を読む

松岡 三夫

風待ちちて翼をやすめている歌人は、何処に軸足を置いているのであろうか。例えばアルプスの岨々たる断崖に爪をしかと突き立て飛翔を待っていたのだらうか。否、ちがうと思う。最初にこの歌集を手にしたとき、評者も、表紙の写真とも相俟って、断崖絶壁にしっかりと立ち、そこから飛翔し、世界

を俯瞰詠したものと思い込み読み進めた。

- ・暁の空晴れ渡り北岳は岩肌かすかに朱に染まりぬ
  - ・頂の稜線深くカールあり水河期のまま岩乾きるる
  - ・安房川に照葉林の明るかり川は海への光りまじへる
  - ・辿りこし三条大橋渡り終ゆ六十九宿 旅は果てたり
  - ・豊かなる翼広ぐるコンドルにアンデスの山深く高かり
  - ・天空に春は来たりぬ麦青み菜の花の咲く鳥葬の丘
  - ・欧州と亜細亜を分かつボスボラス海峡白く冬波の立つ
  - ・柔らかき腕は翼 たたむ時嬰兒は七色の夢見る
  - ・ああそうか、そうかと合点した。風を待つ翼は、
  - ・己の羽化待つごとと眠る嬰兒の口許の笑み未来ほどける
- の未来なのである単なる飛翔詠ではないのだ。翼は未来の風をうけるもの。歌人は風を待つて飛翔し世界を睥睨し俯瞰詠をしようなどとは露思っていないのだ。そういえば、すでに、
- ・初夏は落葉松林より生れしと思ふ風の道を行きたりと風待つ詩を詠んでいるのである。足はしっかりと大地に立つて未来を見据えているのだ。
  - ・還らざるもの多かりき八月の真空の空 風は戦がず

・風待ちの港と思ふ母の家に葡萄色なる秋の風立つと風は詠まれている。そして母の歌、といえ、次の歌、

・「まあ、あなたわたしの子ですか。それはまあ」母の放てる淋しき飛礫

である。何年かまえNHKテレビ「小さな旅」で歌人が母の介護に故郷の信濃へ通った旅を綴った作品が放映された。その時にこの歌をはじめて知った。このどこかユーモラスな

歌に思わず笑った。そして、時を経て、繰り返して読むうち、その淋しさの深さを知った。そして今こうして歌集に入り改めて読む時、その奥深い悲しみを思う。ユーモアに包まれた悲嘆ここに極る。人間が人間として持つ愛と哀しみ。

・彷徨ひて記憶の戻る術の無き母住む信濃に吾は通ひぬ

・孝行は親捨てる事と母の言ふ「本当に捨てちゃうよお母さん」

こう詠み切る歌人の心の痛みは果てしない。

・かなしみは母ある事を思ふ夜の甲府盆地はやみにきらめく母への鎮魂歌である。それは風の歌人、風の詩人である石塚立子の翼を休め次に飛翔する地点である。太陽の舟にこのような閨秀歌人のいることを誇りたい。

## 会員サロン

富永 道子

庭に水槽を置いてある。地面に穴が開かないよう、雨垂れを受けるための物で、直径40〜50cmのプラスチック製。

そこに、夏は15匹位生きてたはずの金魚が三匹にまで減ってしまった。

餌をやると一斉に集まっていたのに、今は近づいただけで水草に隠れてしまう。

近所のかしこそうな白黒猫か、喧しい椋鳥の仕業かと思っていた秋のある日、隣家のご主人から「水槽の上にな

猫がのぼろうとしてる」と小声の電話。カーテンを、そおつとめくったのに白黒猫は一目散。前隣の塀の陰から偵察されて腹立たしいこと。すぐに水槽に金網を被せた。

それから数日後、風もないのに、気がかりな金網のずれがあった。そして又数日後、庭に動くものの気配を感じたらくだんの猫。ぬき足さし足で水槽に近づいている。証拠写真にしたいけど、カメラの類は部屋の奥。私の動きを察して逃げられるのが癪だから、思い切りガラス戸を叩いてハッとした。割れなくて良かったあ。

今も金魚は警戒心旺盛。あれ、又減ったと思うほど。覗いている内は現れない。

ちなみに、その金魚達の名前は、篤姫、尚五郎、本寿院である。

夏休みで遊びに来た時、鹿屋の六歳の孫がつけてくれた。娘宅では、鹿児島に住みながら、ドラマ「篤姫」は見えないという。どれが篤姫でどれが尚五郎か見分けがつかないが、素早いのを『本寿院これ』と指差した孫に従い、その時々、早く目にとまったを本寿院としている。

春になったら、幾島や西郷や滝山など増やしてあげよう。折角名付けた覚えのある名だから。



# 作歌の目・作歌の技法（第四十九回）

## 哲学をする短歌

三木 勝

短歌は哲学をする。なぜなら短歌は、哲学の発生してくる哲学の基礎・土台・根源を旅するからである。哲学は、その哲学をする動機自体をも哲学する。換言すれば、なぜ人は哲学をするのかまでをも哲学は問うのである。そして人はどうして哲学をすることが出来るのか、哲学をしている私をどうして私が認識していることが出来るのか。認識している私と認識をされている私が、認識主体と認識対象に分離することが出来、分離されているのに、どうして主体と対象が分離できない統一体なのかを哲学は考える。分離されて分離できない存在の有機性の組織的機能には、組織的目的性があるのかも問う。組織には組織維持の目的性が必ずある。それがなくては組織は、組織的には動けない。それであるが故に分離されて分離できない存在である私の存在が持つ組織の有機的目的性とその組織が先天的に賦与されている組織的機能が向かう方向性が、自ずから認識対象として浮上してくるのである。短歌は、その方向性を問うのである。短歌は、私たちの存在が、先天的に賦与されている存在の機能と方向性を絶えず探り続ける旅をしているのである。短歌は、作者がそのことを意図しているかどうかにかかわらず、作者をその方向へと向かわせる機能を内蔵している。それ故に短歌は、哲学をする

のである。

哲学は自明性を方法的な基礎として、自明的事実からその論証を始めていく。哲学とは、自明的事実から出発して、結論に至るのであり、その結論が普遍的に当為である、普遍的に正しいことの証明をすることが哲学をすることである。その証明の方法は古代エジプトの土木工事に伴う幾何学から始まって、ギリシャに渡って、プラトンやアリストテレスで花開き、そしてローマへ、ローマ帝国の滅亡と共にその哲学は、イスラムの世界へ受け継がれ、その後再びヨーロッパへ渡り、トマス・アクイナスを頂点とするスコラ哲学を生み出した。トマスを中心とするスコラ哲学が生み出した論理学とその証明の方法が、その後、すべての学問の方法的基礎となり、今日の科学をも生み出した。自然科学、社会科学のいずれの分野も、科学の名がつく限り、スコラ哲学が確立した論理学的方法の影響を免れることが出来ない。科学とは、個々の存在の中における個別性が、個別性を持っているが故に普遍性をその中に内蔵していることを証明することである。個別性の中における普遍性を論理的、客観的に抉り出すことによって、すべての個々を動かすことの出来る原理を発見していくことが科学である。その原理の発見が、発見であることを証明することが哲学である。発見の証明を物質・存在との関係において可視化していくことが、実験であり、その系統的・組織的積み重ねが科学なのである。個別性とは、普遍性の実現体であり、個性とは、普遍性の変形であるが、科学を辿り、更に根源的に科学から哲学へと遡って行く時、このことが見え

てくる。近代ヨーロッパからの流れを汲むすべての学問は、このような哲学・科学の方法論、つまり論理学を踏襲するものである。換言するならば、論理的とまらないものは、学問・科学の対象とはならないことであり、論理的でないものをどのように論理的とするかが、学問・科学をするということである。更に換言すれば、論理的とならないものは、学問とはならないということであり、学問とはならないものは、学問の世界から切り捨てられていくということである。その逆を言えば、学問は、その学問が論理的に切り取り再構成することができない世界は相手にせず、相手としない世界に対しては、非力となるのである。

さて、ここから短歌の哲学性について考えてみよう。冒頭で「短歌は哲学をする」と書いたが、短歌は、どのように哲学をするのであろうか。換言すれば、エジプト古代の土木工事に伴う幾何学からイスラム・近代ヨーロッパに至るまでの論理の世界と短歌の世界との接点は、どこにあるのかということを問うことである。哲学は論理を道具とする。しかし哲学は、その論理自体を疑うこともその使命とする。論理自体の疑い・検証も論理的でなければならぬ。哲学はどこまで行っても、論理的である。論理的であるが故に哲学となり、学問となる。

しかし振り返ってみるに、自明も論理も認識する主体・我我・人間がいて、存在するのである。自明や論理は、個々の人間が消滅しても別の個々の人間がいれば、受け継がれていく。であるが故にその自明や論理は、普遍性を持つのである。

り、普遍的存在なのである。であるが、普遍や自明は、個々の人間を通して認識される。個々の認識は、深い山奥の葉の一滴の雫のようなものである。ひとつの雫が、無数に集まって、せせらぎとなり溪流となり、大河となって大海へでる。このような山奥の葉の一滴の雫のように私たちの生の日常の中から、私たちが感じたこと・認識したこと一滴を書き留めて置くことが、短歌なのである。感じた一瞬を書き留めて置くことには、論理性や自明性はない。しかしその歌が、論理性自明性を内包している時には、その歌は説得力を持ち普遍性を持つ。論理性自明性のない世界から、非論理的手法によって、論理性自明性を引き出していく根拠を探り当てていくこととする行為が、芸術的行為であり、作歌をすることである。このことによって、短歌を作るという行為は、論理と自明を作り出していく基盤を形成していく行為といえる。短歌は哲学の全てとは成り得ないが、哲学が発生してくるその基盤を、つまり人の心を旅する。短歌は、肉体から発生していく感覚と感情とを捉え、肉体と論理の、物質と論理の狭間に存在して、論理では捉えられない世界を把握し、論理の発生の基盤の確保を担保する。このことは、谷川健一が、最近の民俗学者たちは短歌を作らなくなったから日本の民俗学はだめになったのだということに繋がっている。(日経新聞2008年5月31日「私の履歴書」)。哲学の基盤の涵養なくして哲学は発展せず、学問も科学も早晚失速をする。この意味において短歌は、作歌は哲学の基礎を哲学する大切な行為なのである。

文語で短歌を詠む人のために (二)

奥田 清

(ア) 作品Ⅰ・Ⅱにみられる仮名遣い、送り仮名の問題点  
 ねいき聞<sup>1</sup>ひて旅のつかれのこともある息することの有情<sup>2</sup>  
 かなしき  
 五十年も田植せざりし科なれば小さき代田手で<sup>3</sup>植へ<sup>4</sup>にけ  
 り  
 田植して土色になる<sup>5</sup>洗い水ふる年月の淡きに<sup>6</sup>こりぞ  
 観想の弟子の用意が整へば師は現るる<sup>7</sup>自ず<sup>8</sup>からと母  
 年ごとに<sup>9</sup>勢い増せる<sup>10</sup>ぶどう葉よわれは年ごと<sup>11</sup>いきほひ  
 失せし  
 行く先を知らせぬツアー大盛況羽田を<sup>12</sup>発ちて<sup>13</sup>いずこへ  
 向かう<sup>14</sup>  
 色付きし南天の実が小雀を<sup>15</sup>誘うかのごと輝き揺るる  
 挿し木せし沈丁花の小枝花芽つけ彼岸に咲くと<sup>16</sup>勢いみせ  
 る  
 しっかりと梅雨の青葉の峠越え美女伝説に<sup>17</sup>思いを馳せる  
 病みて<sup>18</sup>なお  
 知<sup>19</sup>つて<sup>20</sup>いる筈の事柄消えゆきて淋しく悲しき吾の八十路  
 は  
 傍線部1聞ひては「聞く」四段活用の連用形「聞き」とあ

るべきだが、接続助詞「て」につづけたので、イ音便化させ、「聞  
 いて」と表現するのを、古風な味を求めてハ行に表記したか。  
 傍線2「植へ」はよくある間違いである。下二段活用の動詞  
 のうち、「植う」、「飢う」、「据う」の三語は、ワ行に活用する。  
 よって、その連用形は「植ゑ」である。傍線3「洗い水」は「洗  
 ふ」ハ行四段の動詞の連用形が名詞の「水」と複合して名詞「洗  
 ひ水」となったもの。名詞であるから慣用に從って「洗い水」  
 と表記したのである。傍線4「自ずから」はミスプリント  
 かとも思われるが、副詞で「おのづから」と表記すべきである。  
 この副詞は、おもしろい。修飾すべき用言「現るる」が先に  
 書かれていて「母」の後には「言ふ」などが略されているの  
 で、知的な技巧を味わうべきである。傍線5「勢い」の表記  
 は傍線7「いきほひ」が正しい。傍線6「ぶどう」は「ぶだう」  
 と表記する。が、固有名詞は、現代仮名遣いでよいと私は思っ  
 ている。傍線8「いずこ」は「いづこ」と書く。「いづくんぞ」  
 などもあり、「ジ・ズ」と発音するものはほとんど「ぢ」「づ」  
 と書いてよい。(例外はある。後日説明する。)傍線9「向か  
 う」10「誘う」11「勢い」12「思い」は、すべてハ行の四段  
 活用であるから、「ふ」「ひ」と表記すべきである。傍線13「な  
 お」は「なほ」。傍線14「知つて」は「知りて」の促音便形で、  
 15「いる」は本来「ゐる」ワ行で表記すべきだが、日常生活  
 上の事柄を平明に表現するために「知っている」と表記した  
 のだろう。

# 歌帖余白（六十二） — 編集雜記 —

松岡 三夫

これは清兵衛と云う子供と瓢箪との話である。この出来事以来清兵衛と瓢箪とは縁が断たれて了ったが、間もなく清兵衛には瓢箪に代わる物が出来た。それは絵を描く事で、彼は嘗て瓢箪に熱中したように今はそれに熱中している……

で始まる短編『清兵衛と瓢箪』は、よく知られているように志賀直哉の作品です。志賀直哉は一八八三年二月二十日宮城県に生れ、祖父直道の影響下に育ちます。一九〇〇年から約七年内村鑑三門下であったが、靈肉の相克に悩みキリスト教を離れます。一九一〇年学習院時代からの友人武者小路実篤らと『白樺』を創刊、「網走まで」を発表。絶対的な自我肯定に基づく直観的描写で対象を鋭く把握した「剃刀」「大津順吉」「清兵衛と瓢箪」「汜の犯罪」などで世に認められ、まさしく「小説の神様」となります。唯一の長編小説に『暗夜行路』があります。

志賀直哉の作品は、直哉自身の体験した出来事を、もう一度生き直すことによって作品として成立したのだと言われます。作者自身を書くのではなく、他人の経験した事実や、想像のことがらを書く場合でも、創作主体が一人物に入り込み、いきいきとした感情、行動の統一体として生きることによって、それを形成する場合、作中人物は、作者からいっての一人称

的実質のものになろう、と須藤松雄は述べています。例えば、清兵衛と瓢箪は、他人であり他人の経験であっても、瓢箪好きの少年の話を聞き、その少年に入り込み、行動統一体として生きるとき、「清兵衛と瓢箪」の世界ができたのです。小説の主人公と作者はおおむねその関係にあるわけだが、志賀直哉の場合、「文字通りもう一度生き直す」この意味を強くもっています。

また志賀直哉の文章について、波多野完治は、文と文とのつながりの希薄さに加えて、省略がおおいことを指摘して次のように説明しています。

「志賀氏の文のもつ弾力はこういう極端な省略にあると思う。人は省略されたことによって文章から文章に移るさいに飛躍を経験する。ここで、弾力の第一の感じがでてくる。次に、人は省略の箇所を無意識に補う努力をする。第三に、助詞の付かない体言止や連体止の終止によって、大きな停止の感じをうけ、それが次へ移るさいの踏切板になる。ここにまたリズムの生れる余地がある」

小説もそうであるが、特に短詩型文芸の詩や短歌や俳句には、この省略が命であるともいえます。芭蕉翁も「言ひおほせて何かある」（去来抄）と喝破しています。

そして『清兵衛と瓢箪』は次のように終わります。

・清兵衛は今、絵を描くことに熱中している。これが出来た時に彼はもう教員を怨む心も、十あまりの愛瓢を玄翁で破って了った父を怨む心もなくなつて居た。然し彼の父はもうそろそろ彼の絵を描くことににも叱言を言い出して来た。

# 歌会報告

本部歌会 12月例会(第347回)

日時 12月13日(土) 13時~16時40分

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

出席 32名 出詠 33首

司会 原田 寛 同人

今年最後の歌会は軽妙な原田同人の司会の元、参加された会員の一年間の熱い思いが漂うなか、真摯な意見が飛び交い予定時間が延びるほど熱の籠った歌会でした。

・ものなべて芽ぶく春遠くありとしても子を抱く妻の頬が匂へり  
「太陽の舟(漱石忌前後)」

阿部先生のお母様は十日が命日である。この歌は子を抱く優しい父親であると同時に奥様への愛情が表現されている歌であらう。

今月は特に人生の先輩方による心の奥の感情を詠った良い歌が多く、人生のあり方・心の持ち様について教えられ、また短歌表現の奥深さ、難しさを学ぶことが出来ました。

今月の高得点歌は左記の通りです。

・水底に枯れ葉静けし去りゆかむ秋を沈めてせせらぎ流る

佐伯 朋子

・云うことを聞かぬ体と付き合ふ日々侘助ゆかしく白き花持つ  
土屋 道子

・  
深谷支部 支部長/志賀 倭子  
(北川記)

日時 12月13日(土) 10時~12時

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

司会 北川 昭

出席 7名 出詠 8首

詠草について自由闊達な意見交換がなされ、作者の意図と異なる受け止め方をされたり、言わずもがなの表現があったりするのは、推敲の至らなさを実感させられる歌会でした。

今月は佐伯・志賀さんの七首について取上げられ、歌の内容とは別に掲載する歌題の表記についても工夫が必要という意見がありました。

なお、支部詠草の推敲で大変良くなったのは次の歌です。

・BGM流る手術台身を伏せし足裏さけば陶器残片

・手術台にBGM流れ伏せし身の足裏裂けば陶片出づる

水戸支部 支部長/長須 正文  
(推敲後) 河野 静子  
(岩橋記)

日時 12月14日(日) 13時~16時

場所 びよんど(男女センター)

司会 岩橋千代子

出席 7名 出詠 11首

夜来の雨が残り肌寒い日で深谷さんもお休みでした。長須先生のミニ講座は窪田空穂でした。人となりから歌の傾向、そしてうたの鑑賞へと進みました。

そのあと一人一人のうたについて各人の批評、意見などで盛り上り、先生にまとめていただき充実した時間を過ごしました。

・せせらぎにかすかに揺るる枯蓮葉遊歩道わたるわれの足下

深谷 充代

水戸支部 支部長／長須 正文 (岩橋記)

日時 12月21日(日) 10時～13時

場所 笠間市公民館

司会 岩橋千代子

出席 5名 出詠 10首

先月から新しい公民館での勉強、さすが旧町議会会場であって、絨毯を敷きつめた廊下と何もなくても一寸改まった感じの部屋、勉強にも熱が入りました。うたは自分だけが納得したのではなく他の人からも理解されなくては駄目だということを学びました。

・早々と眠剤飲みてい寝るわれ歌詠む折りはそを忘れをり

品川支部 支部長／久保田昭江 鶴来けい子 (宮井記)

日時 12月18日(木) 13時～16時

品川支部会場には築山風の庭があり、真盛りの紅の山茶花を眺めながらなごやかな半日を過しました。

・洗濯を終えて畳に一休み傍近く聴くコホロギの歌

大田支部 支部長／庄司 久恵 吉田 律子 (川村記)

日時 11月29日(土) 13時～16時20分

場所 山王高齢者福祉センター

出席 9名 出詠 9首

司会 川村 貴美

第317回の歌会である、本部きゅりあん11月歌会第346回を追いかけての長生きと些かの自負。新入会の石田さん植松さんが出席。新人を迎えるというのは新しい水を注がれるような

緊張と喜びがあり、活き活きとする。本音の通う親しい集りでこれからもと念われる。

・大仕事終えて目を閉じ横たわる感謝の念に心浸して

石田 時子

大仕事って何だったのか、具体的に表現すれば訴える力が大いなのは、との評。

千葉支部 支部長／原田 寛 (渡辺記)

日時 12月20日(土) 13時30分～16時30分

場所 穴川コミュニティセンター

司会 森 五貴雄

出席 16名 出詠 18首

千葉支部会員矢島雅子さんが11月24日逝去されました。療養中でしたが、回復・復帰を一同信じていましたので本当に残念です。御冥福をお祈りいたします。

歌会は渋谷支部の丸山孝一郎氏が出席してくださり、また見学参加の方もあり、充実した意見交換が出来ました。11月下旬会員有志が鴨川の地を訪ねた際の歌も四首寄せられました。歌会終了後、恒例の忘年会が加藤さんのお店で開かれ、和気藹々、大いに楽しみました。

高得点歌です。

・花に埋もれて旅立ちし矢島さんもっともと歌詠みたかっ  
たね 照山 好子

・「ガンガンと酒飲んで」と今年の賀状駄じゃれせし友の  
笑み今は無し 小貫 昭

・寒風に閉じざる羽根の震へるて死を待つ芝のかまきり静か  
高崎 邦彦

太陽の舟短歌会

平成20年会計報告書

(平成20年1月1日～12月31日)

収入の部			支出の部		
科目	金額	前年実績	科目	金額	前年実績
前年繰越金額	250,751	284,893	歌誌印刷代	2,902,620	2,756,250
会費収入	2,860,600	2,932,600	郵送料・通信費	335,911	328,529
寄付金収入	219,000	668,500	本部歌会会場費	40,800	34,600
歌誌販売収入	29,500	51,500	雑費	56,973	39,000
原稿用紙販売収入	7,200	13,600	新年歌会開催費	364,066	353,127
本部歌会参加収入	218,000	196,000	全国大会開催費	625,002	1,122,737
歌集販売収入	0	86,600	運営健全化積立支出	0	800,000
新年歌会参加収入	391,000	402,500	活動活性化積立支出	0	100,000
全国大会参加収入	628,000	1,148,000			
雑収入	932				
預金利息	173	801			
収入計	4,354,405	5,500,101	支出計	4,325,372	5,534,243
			翌年繰越金額	279,784	250,751
合計	4,605,156	5,784,994	合計	4,605,156	5,784,994

資金繰越内	現金	振替郵便高	通常貯金	定額貯金	翌年会費入金	運営健全化積立金	活動活性化積立金	翌年繰越金額
	0	844,813	266,471	2,500,000	-1,231,500	-1,600,000	-500,000	279,784

寄付金明細(敬称略)	三晃社50,000	庄司同人30,000	石塚同人30,000	金子元同人20,000
	水戸支部16,000	月の船支部10,000	鈴木同人10,000	伊豆支部9,000
			岐阜支部5,000	匿名39,000

上記会計報告につき、相違なきことをご報告申し上げます。

平成21年 1月10日

監査人 丸山 孝一郎

会計掛 北川



上記会計報告は「監査役」による監査及び「三役」の承認を得て報告するものであります。  
 当月歌誌の掲載をもって会計報告と致しますので、会員各位のご了解をお願い申し上げます。  
 なお、会計報告に関するご質問などにつきましては、会計掛北川までお問い合わせ下さい。